

日印関係の歴史は古く、国交樹立はインド独立からわずか5年後の1952年だった。インドに対する日本の政府開発援助(ODA)は58年の第1次円借款から始まり、以降両国間の友好関係の構築と強化に寄与してきた。ヴァラナシ国際協力・コンベンションセンター建設プロジェクトも日本の無償資金協力によるものだ。2016年日印首脳会談の際には本プロジェクトについてモディ首相より感謝の意が示され、両国の友好関係強化の象徴となった。

コンベンションセンターの位置するヴァラナシ市は、聖なるガンジス川に臨む、数千年の古来より厚い信仰を集めるヒンズー教の聖地だ。インド政府の掲げるスマートシティー構想の対象都市、また国際連合教育科学文化機関(UNESCO)の創造都市ネットワーク音楽部門の加盟都市であり、今後の経済・文化的な発展が期待される。コンベンションセンターは観客席数1200席のメインホールを

海外建設協会

プロジェクト便り

◆インド

ヴァラナシ国際協力・コンベンションセンター建設計画

フジタ

日印の友好関係を象徴

有し、知的交流・芸術的交流・人材交流の拠点となる。

建物のデザインは、ヒンズー教のシンボルであるシバリンガムがモチーフになっている。モディ首相によってコンベンションセンターには「ルドラクシャ(Rudraksha)」(菩提「ぼだい」樹の実)という愛称が付けられた。このルドラクシャは建物の装飾デザインにも使用されている。

複雑で立体的な考慮を必要と

する形状の建物のため、BIMを採用して施工を行った。エントランス上部大屋根を斜め鉄骨柱で支え、各種円形線を駆使した平面形状を持った複雑な構造の建屋で、さらに舞台外周には、鉄骨フレームを上部躯体より支え外部へ跳ね出した構造の外壁デザインを採用している。

新型コロナウイルス感染症のパンデミック(世界的大流行)は、本プロジェクトにも大きな影響を与えた。感染が広がった際には、政府によってロックダウン(都市封鎖)が実施され、労働者を含め職員全員が移動できずに宿舎での待機を余儀なくされた。屋根施工中の突然の外出禁止令であったため、長期作業中止に対する備えを行うことができず、内装材に対する再施工を行わざるを得ない事態も発生した。ロックダウンが解除されたと同時に作業に取りかかれたものの、多くの労働者を呼び戻すのに約1カ月を要した。

インドは大気汚染、水質汚染、廃棄物など深刻な環境問題を抱えている。ヴァラナシも例外ではなく、環境改善は喫緊の課題となっている。コンベンションセンターの大きな特徴の一つ

環境配慮型設計で課題解決に寄与



エントランス(写真右)と観客席(同左)の内観

システムGRIHA(Green Rating for Integrated Habitat Assessment)のC3等級取得に向けて動いている。本プロジェクトはエネルギー消費や周辺居住者の健康と福祉、地球環境と地域環境への影響について検討することで建設の段階だけでなく、保守運用の段階においても環境に配慮している。

「『高』環境づくり」をスローガンとするフジタは、インドのプロジェクトにおいても国内外で培った高い技術力によって快適で豊かな環境づくりに取り組んできた。ヴァラナシ国際協力・コンベンションセンターは両国の友好の証であり、ロビーには日印関係強化の立役者で「日印新時代」を築いた安倍晋三元首相とモディ首相の写真が数多く飾られている。

竣工翌年の今年は、日印国交樹立70周年という節目の年に当たる。世代を超えて日印双方の夢と希望がともに発展し続けることを願って掲げられた今年のテーマは「Building a future for our Century」。フジタは建設プロジェクトを通して、日印関係の強化とインドのさらなる発展にこれからも貢献していく。

(国際事業部 南アジア部・田畑貢)